

ヨエル書とラオディキアのセブンスデー・アドベ ンチスト教会-第三十二号

Jeff Pippenger

2026-01-20

第三十二番

私たちの証人としてペテロを伴い、ヨエル書に至るまでの歩みはゆっくりと進んできた。ペテロは、神の預言の御言葉における最も驚くべき象徴の一つである。もっとも、そこにある象徴は皆、驚くべきものではないだろうか。ペテロはカイサリア・ピリピにおり、また、ペンテコステの時には第3時に二階の広間に、そして同じ日の第9時には神殿にいた。イエスは第3時に十字架につけられ、第9時に息を引き取られた。ペテロは第9時にカイサリアへと呼び出されるが、コルネリオの物語において彼が呼ばれたそのカイサリアは、ヘルモン山の麓にあるカイサリア・ピリピではなく、海辺のカイサリア、すなわちカイサリア・マリティマであった。

カイサリア・マリティマは地中海沿岸の都市で、現代のテルアビブの北約30~35マイルに位置する（ヘロデ大王が壮大なローマの港湾都市として建設した）。使徒行伝にしばしば登場し（15回言及される）、新約聖書で単に「カイサリア」と呼ばれる場合、たいていこの都市を指す。伝道者ピリポは、預言する四人の娘たちと共にそこに住んでいた（使徒8:40; 21:8）。パウロはそこで二年間拘禁され、総督フェリクスおよびフェスト、ならびにアグリッパ王の前に出頭した（使徒23-26章）。おそらくさらに重要なのは、ここでペテロがローマの百人隊長コルネリオに説教したことである—これは異邦人のキリスト教への最初の重要な回心（使徒10章）であり、西暦34年、すなわちキリストが多くの人と契約を堅くされたその一週が終結した時に起こった。

彼は一週のあいだ多くの者と契約を堅く定め、週の半ばにいけにえと供え物をやめさせ、忌むべきものの蔓延のゆえにそれを荒廃させる。終局に至るまでそうであり、定められたものが荒廃の上に注ぎかけられる。ダニエル書 9:27

カイサリア・マリティマは、ユダヤにおけるローマ帝国の行政首都であり、主要な異邦人の拠点でもあった。これとは別の都市であるフィリポ・カイサリアは、はるか北、ヘルモン山の麓近く（ガリラヤ湖の北約25~30マイル）、すなわち今日のゴラン高原地域（現在のバニヤス）に位置する。イエスが弟子たちをフィリポ・カイサリアへ伴われた際のみ、福音書（マタイ16:13、マルコ8:27）に言及が見られる。ここは、ペテロがイエスを「メシア、生ける神の御子」と告白し、またイエスが「この岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の門もこれに打ち勝つことはない」と宣言された場所として著名である（マタイ16:13-20）。そこは、ギリシアの神々、とりわけ山羊神パンのための神殿が建てられた異教の地域であり、そのパンの洞窟が「地獄の門」と呼ばれていたため、そこでのイエスの宣言はいっそう際立っている。

この二つの都市は、地理的にも歴史的にも全く別個の存在である。一方は南西部にある活気に満ちたローマの海港であり、他方はヨルダン川の源流近くに位置する北方のヘレニ

ズム的・異教的な地である。沿岸の方は使徒行伝において中心的舞台となり、北方の方は福音書における転換点となる場面の中心的舞台である。海のカイサリアはローマ、すなわち獣の象徴であり、地のカイサリアは竜の象徴である。ホワイト姉妹は、十字架からペンテコステに至る期間、すなわち「ペンテコステの季節」を、十字架に始まりペンテコステで終わるものとして特定している。

私は、あの時にもまさる力をもって五旬節の日の出来事が繰り返される時を、切なる思いで待ち望んでいる。ヨハネはこう言う。「私は、大いなる力を帯びた別の御使いが天から下ってくるのを見た。地はその栄光によって照らされた。」その時には、五旬節のときと同じように、人々はそれぞれ自分の言葉で自分たちに語られる真理を聞くことになる。

主は、まことにご自身に仕えたいと願うすべての魂に新しいいのちを吹き込み、祭壇から取った火のついた炭でその唇に触れて、主の賛美を雄弁に語る者としておできになる。幾千の声が、神の御言葉の驚くべき真理を語り出す力に満たされるであろう。どもる舌は解き放たれ、臆病な者は強められて、真理のために勇敢に証しする者とされるであろう。どうか主が、ご自分の民を助けて、魂の宮からあらゆる汚れを清めさせ、また、後の雨が注がれるときそれにあずかることができるほど、主との親しい交わりを保たせてくださいますように。Review and Herald, 1886年7月20日

厳密には、ペンテコステの季節は初穂の祭りに始まり、これはキリストの復活と一致する。しかし十字架の死がなければ、救い主がよみがえられるとき御自身とともに携えられるべき御血は存在しなかった。主の死がなければ、「いのちのパン」である主は、種入れぬパンの祭りの日に安息されることもなかった。そして「いのちのパン」は、初穂の祭りにおけるよみがえりに先立って安息している必要があり、かくしてペンテコステの日と祭りへと至る五十日の期間が始まった。

キリストが一週のあいだ契約を堅固にしに来られたとき、その週は彼のバプテスマに始まり、その後「週の半ば」、すなわち三年半後に、主は十字架に付けられ、種入れぬパンの祭りの日に墓において安息され、日曜日に大麦の刈り入れの初穂の祭りにおいて復活され、こうして五十日にわたる五旬祭の期間が始まり、それは小麦の初穂の祭りに至った。十字架から三年半を経て週の終わりに至るまでの間に、この七年の期間は、カイサリア・マリティマのコルネリオをもって完結した。彼は紀元34年、週の終わりに、キリスト教会への最初の異邦人改宗者となった。

キリストが契約を堅固にされるために来られたその一週は、預言的には2,520日であり、十字架は「その週の半ば」に当たるので、十字架は洗礼から1,260日後であり、コルネリオの回心の1,260日前であった。十字架において、キリストは第三時に十字架につけられ、第九時に息を引き取られた。これが五旬節期の始まりであり、その終わりには（というのも、イエスは常に初めをもって終わりを示されるからである）、五旬節の日に、ペテロはキリストが復活の日に弟子たちにお会いになったあの二階の広間で第三時にヨエル書に基づく最初の説教を行った。次いでペテロは第九時に神殿でヨエル書についての第二の説教を行った。明らかに、第三時と第九時とは、五旬節期の始まりと終わりを示すアルファとオメガの象徴である。

行に行を重ね、これら二つの出来事の第三時と第九時を対応させると、六時間という預言的期間が見出され、両者はいずれも区分の証しを与えていることがわかる。キリストは命から死へ、そして再び命へと進む。彼は地から天へ、そして再び地へと戻る。ペテロは外にあり、やがて神殿の内にいる。無論、第三時から第九時の他の並行的対応も存在するが、まずはペテロ、コルネリオ、そして海辺のカイサリアを考察する必要がある。

六つの時刻において表されている預言的区分と同様に、ペテロを呼び寄せるようコルネリウスに指示するために天使が遣わされたのは、第九時であった。

カイサリアにコルネリオという者がいた。イタリア隊と呼ばれる部隊の百人隊長である。彼は敬虔な人で、家の者すべてとともに神を畏れ、民に多く施しをし、絶えず神に祈っていた。彼は日の第九時ごろ、幻のうちに、神の御使いが自分のところに入って来て、「コルネリオよ」と告げるのを、はっきりと見た。彼がその者を見つめると恐れ、「主よ、何事でしょうか」と言った。すると彼は言った、「あなたの祈りと施しは、記念として神の御前に上った。今、人をヨッパに遣わし、ペテロと呼ばれるシモンという者を呼び寄せなさい。」使徒行伝 10:1-5。

天使の到来はメッセージの象徴であり、また道標の象徴でもある。天使が「あなたの祈りと施しは記念として神の御前に上った」と言うとき、彼はそれが道標であることを確認している。週の結びの道標は、コルネリウスが四日間断食し、第九時にペテロを呼びに人を遣わしたことであり、これは「記念」と呼ばれる、すなわち道標である。「百人隊長」として、コルネリウスは百人の兵を率いる隊長であった。

マタイによる福音書第十六章において、ペテロがカイサリア・フィリピにいる場面では、いかなる時刻についての言及もない。カイサリア・フィリピとは、イエスが弟子たちをそこへ連れて行かれた当時のその都市の名称である。ダニエル書第十一章の歴史、すなわちパニオンの戦いにおいて成就し、またアメリカ合衆国における日曜法へと至る戦争を予表する十三節から十五節においては、カイサリア・フィリピはパニオンと呼ばれていた。ペテロは、カイサリア・フィリピ、すなわちパニオンにいるとき、十三節から十五節にいる。

パニウムの戦いがダニエル書十一章十三～十五節の成就であること、そして、その諸節とパニウムの戦いの歴史が、アメリカ合衆国における日曜法へと至る戦争を指し示していることを見極めることは、まさに「行に行、規則に規則」の方法論が本来機能するように設計されている通りの在り方である。その方法論を適用することは、カイサリア・フィリピとパニウムとを整合させなければならないことを要請する。というのも、この真理を扱う預言の主要原則は、「古代の預言者たちは皆、自分たちの生きた時代よりも、私たちの時代のために多く語った」という点にあるからである。さらにパウロは、「預言者の霊は預言者に服する」と付言している。ゆえに、彼らは皆、終わりの日々を指し示すのみならず、互いに一致しているのである。

このゆえに、神の預言の御言葉においてパニウムがパニウムとして、さらに後にはカイサリア・フィリピとして同定されるのであれば、終わりの日においては両者ともに適用されなければならない、互いに整合していなければならない。なぜなら、両者は同一の都市だからである。

この論理と結びついてはいるが、やや性質を異にするのが、カイサリア・ピリピとカイサリア・マリティアである。ペテロはキリストとともにカイサリア・ピリピに赴いたが、カイサリア・マリティアへは聖霊によって遣わされた。しかも、両カイサリアにおいて契約における主要人物はペテロである。この筋で注目すべきは、第九時にコルネリウスが天使の訪れを受け、ペテロを呼び寄せるよう命じられたことである。カイサリアにおけるペテロは預言的象徴であるが、この二つのカイサリアは明確に異なる。一方は海辺のカイサリアであり、他方は地上のカイサリアである。海辺のカイサリアは異邦人と結びつけられており、コルネリウスは西暦34年、契約の週の終結のまさに時に、最初の異邦人回心者となった。海辺のカイサリアは第九時と結びつき、ペンテコステにおける神殿のペテロ、そして第九時におけるキリストの死と呼応する。

地にかかわるカイサリア、すなわちカイサリア・フィリピは第三時である。他の選択肢は存在しない。初めにカイサリア・フィリピ、すなわち第三時、終わりにカイサリア・マリティア、すなわち第九時である。フィリピは六時間の期間のアルファであり、マリティアはオメガである。第九時におけるオメガは、契約の週のただ中におけるキリストの死であり、五旬節に神殿にいたペテロもまた第九時であった。コルネリウスがペテロを呼び求めることは、日曜法の型であるキリストの死と、同じく日曜法の型である五旬節における神殿のペテロとに符合する。最初の異邦人改宗者としてのコルネリウスは、日曜法における第一の「十一時の労働者」を表象する。

キリストが十字架につけられた第三時と、ペトロが二階の広間にいた第三時とは、必然的に、かつ専ら、フィリポ・カイサリアを表すものである。五旬祭の日にペトロがいた二階の広間は、キリストがその復活、昇天および降下の後に現れた、まさに同じ二階の広間であった。キリストは二階の広間に来られ、そののち五十日後、五旬祭の日に、ペトロは同じ二階の広間でヨエル書のメッセージを提示した。

カイサリア・フィリピは、十字架刑および五旬節の二階の広間に相当する第三時である。十字架刑は離散の象徴であり、二階の広間は一致の象徴である。これにより、カイサリア・フィリピは、日曜法の直前に位置し、一方の群れが散らされ、他方の群れが集められる地点であることが示される。パニウムの戦いの歴史が繰り返され始めるとき、愚かな乙女たちと賢い乙女たちは永遠に分離され、しかもその分離は、日曜法の接近を表す十字架をめぐって生じる。キリストが差し迫る日曜法について教え始められたのは、カイサリア・フィリピにおいてであった。そのとき、ペテロはそのメッセージに反対した。ゆえに、九節のうちに、ペテロは、十字架のメッセージ、すなわち日曜法によって封印される者たちと、散らされる者たちの双方を代表している。

彼は彼らに言った。「しかし、あなたがたはわたしをだれだと言うのか。」

するとシモン・ペテロが答えて言った、「あなたはキリスト、生ける神の御子です。」

イエスは彼に答えて言われた、「シモン・バルヨナよ、あなたは幸いである。これは血肉によってあなたに啓示されたのではなく、天におられるわたしの父によってである。また、わたしもあなたに言う。あなたはペテロである。そしてこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の門もこれに打ち勝つことはない。わたしはあなたに天の御国の

鍵を授ける。あなたが地上で縛るものは、天においても縛られ、あなたが地上で解くものは、天においても解かれる。」

そのとき、イエスは弟子たちに、自分がキリストであることを誰にも言ってはならないと固く命じた。その時から、イエスは弟子たちに、エルサレムに上り、長老たち、祭司長たち、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、三日目によみがえらなければならないことを示し始めた。

そのとき、ペテロはイエスを引き寄せ、いさめ始めて言った。「主よ、とんでもないことです。そんなことはあなたには決して起こりません。」

しかし、彼は振り向いてペトロに言われた。「サタンよ、わたしの後ろに退け。あなたはわたしのつまずきである。あなたは神の事柄を思わず、人の事柄を思っているからである。」マタイによる福音書16章15-23節。

第三時の十字架刑とペテロの楼上の間におけるメッセージとは、麦と毒麦の双方を有する教会として規定される戦う教会から凱旋の教会へと至る預言的転換に符合している。凱旋の教会は五旬祭における麦の初穂の供え物であり、これは日曜法である。毒麦と麦が成熟に達すると、天使たちが二つの階級を分離する。麦と毒麦を結実に至らせるのは、9/11に降り始めた雨である。

六時間という期間は、エクセターの天幕集会から1844年10月22日に至るまでの歴史、キリストのエルサレムへの凱旋入城、そして王ダビデが契約の箱を携えてエルサレムに入ったことを象徴している。第九時はまた、夕の供え物の時刻であり、午後三時頃に当たる。

さて、祭壇の上に汝が日々絶えずささげるべきものは、一歳の小羊二頭である。その一頭は朝にささげ、他の一頭は夕べにささげよ。出エジプト記 29:38, 39。

「even」と訳される語は、しばしば「夕と夕との間」と表される。「夕と夕との間」とは、第三時から第九時に至る六時間の区間を指す。キリストの契約週は、十字架上の六時間の期間を表し、これが五旬節における六時間の期間のアルファとなる。契約週における二人の証人は六時間の期間を指し示しており、これは聖なる週の予言のみならず、五旬節の季節の象徴とも直接に結びついている。そして、まさにその同じ予言的な週の終わりに、ペテロは第九時にカイサリアへと召される。聖なる週の同一の予言的構造のうちに三度の第九時があるという事実—そのうち二度は六時間の区間のオメガであり、しかもそれは朝の供え物と夕の供え物の間の時でもあった—は、預言的必然として、コルネリウスの第九時に終わった区間のアルファとして第三時が存在することを要請する。

二つのカイサリアは、いずれも中心的人物としてペトロを据え、ピリポのカイサリアを第三時として指し示している。その六時間の期間は、カイサリアに始まり、カイサリアに終わる。終わりは初めによって例証されているからである。

過越の小羊は夕刻、すなわち第九時（キリストが死なれた時）に屠られるべきであった。

あなたがたはこの月の十四日までそれを取り置かなければならない。イスラエルの会衆全体は、夕暮れにそれをほふらなければならない。出エジプト記12章6節。

祈りの時刻は、また第九時である。というのも、それは夕の供え物の時であったからである。

私の祈りが、香のようにあなたの御前に立ちのぼりますように。私の手を挙げることも、夕のいけにえのようになりますように。詩篇 141:2

祈禱の時が夕の供え物の時であることに即して、エズラは夕の供え物の時に祈っている。したがって彼は第九時に祈っているのであり、その時にはペテロは神殿にいて、キリストは死なれ、またコルネリオはペテロを呼びに人を遣わすようにと告げられた。

夕の献げ物の時、私は苦悩から立ち上がり、衣と上着を裂いたまま、ひざまずき、主、わが神に向かって両手を広げた。エズラ記 9:5

エズラは祈りの中で、神殿とエルサレムを再建するためにバビロンから出てきた者たちが異教徒の妻をめぐっていたことを知り、そののち悔い改めている。

そのときエズラが祈り、告白し、涙を流して神の宮の前で身を投げ出して地にひれ伏していると、イスラエルの中から男も女も子どもも非常に多くの会衆が彼のもとに集まった。民が大いに泣いていたからである。エラムの子らのひとり、エヒエルの子シェカニヤが答えてエズラに言った。「われらはわれらの神に背き、この地の民の異国の女を妻にめとりました。しかし今、このことに関して、なおイスラエルには望みがあります。ゆえに今、われらの神と契約を結び、わが主のご助言と、われらの神の戒めにおののく者たちの助言に従って、すべての妻と彼女らから生まれた者を退け、これを律法に従って行われるようにしましょう。立ち上がってください。この事はあなたの務めです。われらもあなたとともにいます。雄々しくあって、これを行ってください。」

そのときエズラは立ち上がり、祭司長たち、レビ人、そして全イスラエルに、この言葉どおりに行うと誓わせた。彼らは誓った。ついでエズラは神の宮の前から退き、エリヤシブの子ヨハナンの部屋に入った。そこに入ると、彼はパンを食べず、水も飲まなかった。捕囚の者たちの背きのゆえに嘆き悲しんでいたからである。そこでユダとエルサレム全域に、捕囚の者たちすべてに向けて、エルサレムに集まるよう布告が出された。さらに、首長たちと長老たちの協議に基づき、三日のうちに来ない者は、全財産を没収され、本人も捕囚の者たちの会衆から除かれる、とされた。こうしてユダとベニヤミンの人々は皆、三日のうちにエルサレムに集まった。それは第九の月の二十日であった。すべての民は神の宮の広場に座し、この事柄のために、また大雨のために、震えおののいていた。エズラ記 10:1-9。

十四万四千人の契約は、異邦の妻をめぐった者たちからの分離として表される。これは賢い乙女と愚かな乙女の分離であり、それは第九時に起こる。すなわち、キリストの死、五旬節の神殿におけるペテロ、そして海辺のカイサリアへの召しを受けるペテロである。エズラの分離はまた、マラキ書三章における「契約の使者」によるレビ人の清めでもある。マラキにおけるこの清めは、キリストによる二度の神殿清めを例証している。

世の買う者や売る者を神殿から一掃して清められたとき、イエスは、罪のけがれ——魂を墮落させる地上的な欲望、利己的な情欲、悪しき習慣——から心を清めるというご自身の使命を宣言された。マラキ書3章1-3節が引用されている。『The Desire of

Ages』 161頁.

エズラと契約に入る者たちは「立て」と告げられ、また、三十八年の歳月のあいだに反逆者たちがすべて死に絶えたのち、ヨシュアには立ち上がるように告げられた。古代イスラエルが十度にわたる試みに失敗するまでに二年を要し、さらに三十八年後には反逆者たちはすべて死に絶え、神は彼らに「立て」と告げる。

「今、立ち上がり、ゼレデの谷川を渡れ」と私は言った。そこで、われわれはゼレデの谷川を渡った。われわれがカデシュ・バルネアを出てから、ゼレデの谷川を渡るに至るまでの期間は三十八年であった。主が彼らに誓われたとおり、戦いに出る者の世代が宿営のうちからことごとく絶え果てるまでであった。申命記 2章13、14節

ヨハネによる福音書第5章において、イエスは三十八年もの間そのような状態にあった男を癒し、彼を癒されたとき、その人に「起きよ」と言われた。

というのは、ある時期に天使が池に下って来て水をかき乱したからである。水がかき乱されたのち、最初にそこに入った者は、その者がどのような病を患っていても癒やされた。また、そこには三十八年もの間病を患っていたある人がいた。イエスは彼が横たわっているのをご覧になり、すでに長い年月その状態にあるのを知って、彼に言われた、「あなたは癒やされたいか」。

その病人は彼に答えて言った。「主よ、水がかき立てられるとき、私を池に入れてくれる者はありません。しかし、私が行くうちに、ほかの者が私より先に下りて行きます。」

イエスは彼に言われた、「起きよ。あなたの床を取り上げ、歩け。」そして直ちに、その人は完全に癒やされ、床を取り上げて歩いた。その日は安息日であった。ヨハネによる福音書 5:4-9。

エズラが十四万四千の契約を例証する場面において、人々は「立ち上がる」べきであった。1838年、著名なミラー派の説教者ジョサイア・リッチは、1840年頃にオスマン帝国の覇権が終わると予告し、ミラー派のメッセージは興り、1840年8月11日の正確な成就によって力を与えられた。勝利の教会の高挙には、契約が確立される時に神の民を立ち上がらせる予告が含まれている。エズラの異邦の妻からの分離において、われわれはマラキによるレビ人の精錬と、キリストによる二度の神殿の清めとを見いだす。そしてそれぞれは、麦と毒麦の分離を指し示しており、それはキリストが十四万四千の心から罪を永遠に取り去る時に成し遂げられる。キリストの第九時と、ペテロの二つの第九時、さらにエズラの清めの祈りは、日曜法の時に符合する。その時、後の雨が限りなく注がれる。ダニエル書九章において、ダニエルは夕の供え物の時、すなわち第九時に、自らの嘆願への答えを受ける。

まことに、私が祈りのうちに語っている間に、すなわち、初めの幻において私が見た人なるガブリエルが、速やかに飛び来るようにされて、夕の供え物のころ、私に触れた。ダニエル 9:21。

シヌアルの大いなる川々のほとりでダニエルに与えられた異象は、現在その成就の過程にあり、また、これらの預言が与えられた時の事情を考慮すべきであることが、私たち

に告げられている。

ダニエルが神から受けた光は、特にこの終わりの時のために与えられたものである。シヌアルの大河であるウライ川とヒッデケル川のほとりで彼が見た幻は、今や成就しつつあり、預言されたすべての出来事はまもなく成就するであろう。

「ダニエルの預言が与えられた時のユダヤ民族の状況を考えよ。」『聖職者たちへの証言』113頁。

ヒッデケル川およびウライ川に関連する幻視の光は、ダニエル書第十一章の最後の六章を表している。ウライ川によって表されている第九章において、ダニエルは第七章、第八章および第九章に関する光を与えられる。ヒッデケル川によって表されている第十章において、ダニエルは第十章、第十一章および第十二章に関する光を与えられる。預言的情報は、これらの章の中に表されている預言的出来事によってだけでなく、ダニエルによっても表されている。というのは、預言が与えられた時のユダヤ民族の状況を考慮すべきだからである。

私たちは、それらの考察を終わりの日々に適用し、他の預言者の証言と整合させなければならぬ。つまり、ペトロがカイサリア・フィリピにも、またカイサリア・マリティマにもいるのと同様に、ダニエルは九章で第九時にガブリエルの訪問を受け、さらに十章では第二十二日に訪問を受けるということである。終わりの日々のためのウライとヒッデケルの光は、第二十二日の第九時にダニエルに対して封印が解かれる。その光は、日曜法において、際限なき後の雨の注出を表している。

ダニエルの証しは第九時において完全に開かれる。なぜなら、それは、終わりの日に神の民に「降りかかる」事柄の外的歴史と内的歴史の双方を明確に指し示すからである。その光が宣べ伝えられるとき、コルネリオに代表される異邦人は十四万四千人を呼び寄せ、神の律法は日曜令の施行によって殺され、ペテロは、キリストが去り、ユダヤ人の空虚な家とされた神殿に向けて宣言を発するであろう。ペテロは異邦人に、またサンヘドリンにも語りかける一方、エズラは離別を嘆願し、ダニエルは光を求めて断食し祈る。五旬節の第九時、キリストの死の第九時、コルネリオがペテロを呼んだ際の第九時、そしてタベのいけにえは、いずれもカルメル山のエリヤと符合する。

六時間の期間は日曜法で終わる期間を表していることは明らかであるが、その開始は終わりと直接結びつく出来事によって標される。朝と夕の供え物がまさにそうであった。ペテロに関して言えば、その六時間の期間はカイサリア・フィリピから海辺のカイサリアに至るまでである。五旬祭においては、それは二階の広間から神殿に至るまでであった。道の初めに据えられる輝く光は真夜中の叫びであり、その期間は日曜法にまで達する。タベとタベの間の六時間は、キリストのエルサレム凱旋入城を表しており、それはさらに、1844年8月12日から17日のエクセターのキャンプ・ミーティングに始まる期間を表していた。この期間はメッセージの宣布を開始し、1844年10月22日にその終結に達した。エクセターはカイサリア・フィリピであり、海辺のカイサリアは1844年10月22日である。始まりはカイサリアによって標示され、終わりもまた同様にカイサリアによって標示される。

エルサレム入城は、初めと終わりにそれぞれ一つの論争によって特徴づけられている。エクセターにおける論争は、会場の敷地内に設けられたウォータータウンの天幕で行われていた偽りの礼拝によって表されていた。二つの天幕によって二つのメッセージが表象され、キリストがエルサレムに入城されたとき、解き放たれたばかりのろばに乗り、オリブ山から下って来られる際に宣べ告げられていたメッセージに対して、あげつらうユダヤ人たちは不平を唱えた。最初と最後の論争は、その期間のアルファとオメガを指し示している。エクセターでは、ウォータータウンの一派は油を持たない処女たちの類型を表し、彼らに対しては救いの戸が閉ざされた。その期間の終わりには、聖所への戸が閉ざされ、このようにしてその期間にアルファとオメガが与えられた。そのアルファとオメガは、エルサレム入城の二つの論争と符合し、また、ペテロにおける「カイサリアからカイサリアへ」とも一致する。

カイサリア・フィリピにおいて、シモン・バルヨナの名はペテロと改められる。そこでは、彼は靈感の代弁者として称賛され、やがて十字架のメッセージに反対したためにサタンとして断罪されるという記述がある。ペテロは、バプテスマと十字架のメッセージによって分けられる二つの階級の象徴であり、このメッセージは9/11と日曜法のメッセージである。

「パリサイ人と取税人に代表されるそれぞれの人々にとって、使徒ペテロの歩みには教訓がある。弟子になって間もないころ、ペテロは自分は強いと思っていた。彼はパリサイ人のように、自分では『他の人々のようではない』と考えていた。キリストが裏切られる前夜、弟子たちに『あなたがたは皆、今夜、わたしのゆえにつまずくであろう』と前もって警告されたとき、ペテロは自信満々に『たとい皆がつまずいても、私はつまずきません』と言い切った。マルコ14:27, 29。ペテロは自分の危険を知らなかった。自己過信が彼を誤らせた。自分は誘惑に打ち勝てると思っていたが、ほどなくして試練が来ると、彼は呪いの言葉を使い、誓って主を否んだ。」キリストの実物教訓、152。

第九時、すなわち夕のささげ物の時に、エリヤの祈りに応えて火が降り、ささげ物を焼き尽くした。これは、主こそ神であることを神の民に知らせるためであった。カルメル山においては、二種類の者が象徴されている。すなわち、その時に主こそ神であることを知る者の一群と、その後には討ち殺されるバアルの預言者たちに代表される他の一群とである。

夕の献げ物がささげられる時刻となったとき、預言者エリヤが近づいて言った。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ、きょう、あなたがイスラエルにおいて神であられること、また私があなたのしもべであり、私がこれらすべてのことをあなたの御言葉によって行ったことが、知られるようにしてください。主よ、私に教えてください、私に教えてください。この民が、あなたこそ主なる神であり、またあなたが彼らの心を再び翻したことを知るようにしてください。」

そのとき、主の火が下って、全焼のいけにえ、薪、石、塵を焼き尽くし、溝にあった水をもなめ尽くした。すべての民がこれを見て、顔を地に伏せて言った。「主こそ神である。主こそ神である。」

エリヤは彼らに言った。「バアルの預言者たちを捕えよ。一人も逃してはならない。」
人々は彼らを捕えた。エリヤは彼らをキシオン川へ連れて下り、そこで彼らを殺した。
列王記上 18:36-40.

夕のいけにえ、キリストの死、ペテロが足なえの人を癒すこと、ペテロがその使信を異邦人のもとに携えること、ダニエルが預言の光を受けること、エリヤの祈りが火によって答えられること、そしてその一方で、エズラは粗布と灰をまとい、ラオデキヤからフィラデルフィアへの移行、すなわち戦う教会が凱旋の教会へと移行するために祈っていること。第九時は、いけにえの時、祈りが答えられる時、天が地に触れる時であり、裁きと憐れみをつなぐ架け橋である。ゆえにキリストは第九時に死なれた。というのも、第九時のいけにえが、暗闇に座していた異邦人に福音を開いたからである。彼らは、ダニエル書が日曜法において完全に開かれる時、大いなる光を見るであろう。

士師記6章21節において、主の御使いは自らの杖の先でギデオンの肉と種入れぬパンの献げ物に触れ、岩から火が湧き出て、それをことごとく焼き尽くした。その火は、ギデオンに対する神の召命と、神がそのしるしを受け入れられたことを確証した。

彼に言った、「もし今、あなたの御目に恵みを得ているのであれば、あなたが私と語っておられることを示すしるしを見せてください。私があるのもとに戻り、供え物を携えて来て、あなたの前にそれを置くまで、どうかここを去らないでください。」
彼は言った、「あなたが戻って来るまで待っていよう。」そこでギデオンは中に入り、一頭の子やぎを用意し、小麦粉一エファで種なしの菓子を作った。肉はかごに入れ、汁は鍋に入れ、それをかしの木の下にいる彼のもとに持ち出して差し出した。すると神の御使いは彼に言った、「その肉と種なしの菓子を取り、この岩の上に置き、汁を注げ。」彼はそのとおりにした。そのとき主の御使いは、手に持っていた杖の先を伸ばして、肉と種なしの菓子に触れた。すると岩から火が立ち上がり、肉と種なしの菓子を焼き尽くした。そして主の御使いは彼の目の前から去った。ギデオンは、それが主の御使いであることを悟ると、言った。「ああ、主なる神よ！私は主の御使いを面と向かって見たからです。」士師記 6:17-22

本章の第一節において天使がギデオンに現れ、彼を「勇士よ」と呼んだので、ギデオンはその主張を証明するしるしを求めた。次いでギデオンは天使にとどまるようお願い、預言においてとどまる天使は第二の天使である。とどまりの時間が終わった後、ギデオンは供え物をささげ、火がその供え物を焼き尽くした。エリヤがタベの供え物の時刻にあったゆえに、ギデオンは第九時にある。そして第九時は、五旬祭の炎の舌が一致する時としての日曜法である。ギデオンは、主を顔と顔を合わせて見る一群を表しており、これはダニエルにおいて第十章で起こったことである。ギデオンは、火が供え物を焼き尽くすのを見たとき、自分が顔と顔を合わせて見た主と相対していたのだと悟った。

火の奇跡がそのしるしを確証するとき、ギデオンはこの現実を目覚める。そして、そのしるしとは、神の勇士ギデオンと、三百人の祭司から成る軍勢であり、彼らは皆、手にハバククの三百の石板を携えていた。このしるし、すなわち旗印はギデオンその人であり、また三百の軍勢でもあり、それはエゼキエル書三十七章において立ち上がる力強い軍勢でもある。

レビ記9章23-24節において幕屋が奉献された際、大祭司アロンが初めてささげ物をささげたのち、主の御前から火が出て、祭壇の上の全焼のいけにえと脂肪を焼き尽くした。民は叫び声をあげ、畏怖して地にひれ伏した。これは、逐一、エリヤの火と一致しなければならない。

麦と毒麦の分離のためのエズラの第九時の祈りは、日曜法において、戦闘の教会が勝利の教会へと変容するとき成就する。それはまたギデオンの火とも一致しなければならない。七日の聖別の後、八日目にささげられたアロンの初めの供え物を焼き尽くした火は、その同じ日に再び下り、アロンの邪悪な二人の息子を滅ぼした。第九時、すなわち日曜法において、聖霊が限りなく注がれるとき、二つの階級の祭司の分離が生じ、勝利の教会は、出て行って勝ち、さらに勝ち進むエペソの白い馬によって象徴される働きを開始する。勝利の教会の油注ぎは、ソロモンの神殿において第二の証言を得る。

歴代誌下7章1-3節におけるソロモンの神殿奉献では、ソロモンの祈りの後、火が天から下って燔祭といけにえを焼き尽くした。主の栄光が神殿に満ち、民は礼拝して、神の恵み深さと、その慈しみがとこしえに及ぶことを宣言した。日曜法のとき、ゼカリヤ書とイザヤ書によれば、勝利の教会は冠と標旗として、すべての山々の上に高く掲げられる。ソロモンの神殿奉献の際に火が下ったとき、神殿は主の栄光で満たされたが、それは、第七のラッパの吹鳴が神の民に対してその働きを完了し、まさに同じ働きを十一時の働き人たちにおいても完了しようとしていることを象徴している。第七のラッパは、贖い、すなわち、イエスとその栄光の御国を高く掲げられるときに生起する神性と人性の結合を表している。モーセの幕屋とソロモンの神殿において下ったその火は、ダビデに対してそうであったように、アロンの子に対してもまた、裁きの火であった。

歴代誌上21章26節において、ダビデの人口調査によってもたらされた疫病のさなか、アラウナ／オルナンの打ち場でのダビデの供え物に対して祭壇の上に天から火が下り、それが受け入れられたことを示し、疫病は止んだ。ラオデキアの疫病は、人間の力と知恵への依存という疫病をとどめるために火がダビデの供え物の上に下るとき、終息する。人間から神的人間への移行は、贖罪が成就し、教会が旗印として掲げられるときに画される。その時、ソロモンの神殿におけると同様に、神性が人性と結合することにより、主の栄光が神殿に満ちる。

次稿において、第三時と第九時によって象徴される「真夜中の叫び」の時期についての考察を続ける。

六日の後、イエスはペテロとヤコブおよびその兄弟ヨハネを連れて、彼らだけで高い山に登られた。そして彼らの前で御姿が変容された。御顔は太陽のように輝き、衣は光のように白くなった。すると、見よ、モーセとエリヤが彼らに現れ、彼と語っていた。

そこでペテロがイエスに答えて言った、「主よ、ここにいるのは、わたしたちにとって良いことです。もし御心なら、ここに仮庵を三つ設けましょう。一つはあなたのために、一つはモーセのために、もう一つはエリヤのために。」彼がなお語っているうちに、見よ、光り輝く雲が彼らを覆った。すると、雲の中から声がして言った、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。彼に聞け。」

弟子たちはこれを聞くと、顔を地に伏せて、非常に恐れた。すると、イエスは近づいて彼らに触れ、言われた。「起き上がりなさい。恐れてはならない。」

そして、彼らが目を上げると、ただイエスのほかにはだれも見えなかった。彼らが山を下るとき、イエスは彼らに命じて言われた、「人の子が死者の中からよみがえるまでは、この幻をだれにも話してはならない」。マタイによる福音書 17:1-9.